

高橋 巨著 『西洋神秘主義思想の源流』

昭和46年3月，創文社刊

大 谷 啓 治

本書の特徴は神秘主義をかなり広く解釈していることと、それに関連するとも考えられるが、いわば神秘主義の周辺にあると思われることがらを多く取扱っていることである。したがって読者は西洋神秘主義思想の源泉となる歴史を広い範囲で知ることができるとともに、文化史、哲学史などでなじみ深いいろいろな事項を、神秘主義という観点からあらためて見なおす機会をめぐまれるであろう。比較的文献のとぼしいこの分野で、総括的な本書の出現は貴重であり、著者の労は十分に評価されるべきである。必要な知識をもちあわせなため、書評の任は重すぎるので、全体的な紹介によって、読者の関心を喚起するにとどめたい。

著者は神秘主義をどのように解しているか、多少長くなるが序言とギリシアの神秘主義と題する第一章の冒頭を引用してみよう。

「神秘主義という言葉は曖昧多義で、この言葉を聞くと人によって色々違ったことが頭に浮かぶと思う。しかしここで言われているのは、ギリシア語の *theoria*、ラテン語の *contemplatio*、一言でいえば、絶対者との触れ合いである。神秘主義が如何なるものか、については私は大体ベルグソンと同じように考える。即ち我々の持つ日常的世界像は、行為的存在者としての人間が、この世界における行為の必要のための、行為に関係のある要素を抜き出して構成したもので、實在の真の姿ではない。この真實在に触れよう、この實在の真の姿を把握しようとするのが神秘主義であると思う」。

「ギリシア人は合理主義的であるといわれる。事実、西洋文明はギリシア人によって合理主義の特徴を刻印されたといつてよいであろう。しかし人間の存在は理性では包み得ない深い層をもつ。あるいはもっと正確に言えば、人間存

在はその根底においては超理性的な深い存在者につながる。したがってギリシアの偉大な思想家達、例えばプラトン、アリストテレス、プロティノスなども合理主義的側面と共に非合理主義的、超理性的側面をもつ。ここではこれらの偉大なギリシアの代表的思想家達の、この超理性的側面を見ようとする……」
(三頁)

要するに著者は、超理性的に絶対者と触れ合うことをもって神秘主義と解しているようであり、かなり広い概念把握といえよう。超理性的、絶対者、触れ合いといった概念がどのような内容をもつかによって、それぞれの思想家、とくにギリシアの思想家とキリスト教的思想家のあいだに、おのずといろいろと異った神秘主義が生れるのは当然であり、それらの関連、相違などを、いわばそれに付随した周辺的なものをまじえながら、歴史的に概観するのが本書の内容である。

第一章では、プラトン、アリストテレス、プロティノスが中心となっているが、まずこれら思想家に影響を及ぼしたと考えられるギリシアの宗教、いいかえれば非合理主義的思想の流れとして、オルフィック教の宇宙発生論、人間論(靈魂説)やエレシウスの秘義が、ホーマー、ヘシオドスなどとの比較もまじえて論じられる。

プラトンについては、「オルフィック教その他より影響を受けた神秘主義的要素が強い」中期と、「合理主義的要素が強まってオルフィック教的神秘的要素は背面に退き、宗教的側面においても、……世界における秩序の支配、更にその秩序の推持者、世界の統制者としての神——有神論に近い神——の概念が前面に出ている」後期を問題とする。中期の神秘思想として著者が取上げるのは、イ)『パイドン』における靈魂不滅の説、ロ)『饗宴』におけるエロスと『パイドロス』における靈魂のイデア界への上昇、ハ)主に『理想国家』のエルの物語にみられる死後の靈魂の問題などであり、とくに「善のイデア」に重要な神秘主義的要素があるとする。後期については、『ティマイオス』や『ノモイ』を中心に検討し、「アナクサゴラスのヌースで頂点に達する正義の神、世界の秩序の維持者としての神という観念」の線上で発展するため、合理的特徴が強くなるとはいえず、かならずしも神秘主義と無縁ではないとしている。

アリストテレスを取扱う第三節では、まず第一次のアテネ時期として、『プロ

トレプティコス』と『エウデモス』などにみられる倫理宗教思想の特徴を簡単に述べ、つぎに小アジア滞在の時期における宗教的に重要な作品『エウデモス倫理学』の第八巻を取上げ、『ここでは、靈魂は自己自身の内部に目を向け自己の内に、自己を越える絶対者を見るようになった』とし、「これはプロティノスの思想へ向かっての重要な歩みである」とみる。第二次のアテネ時期がアリストテレスに関する論述の中心となるが、そこではまず「認識の根底にあるものは、ギリシア人においては、客観を支配せんとする意志ではなくして客観を、世界を、絶対者を、観想せんとする意志、要求である」ことを強調したのち、人間精神の認識構造に関するアリストテレスの考えを解釈する。その場合、とくに『靈魂論』第三巻における能動理性と受動理性が問題とされるが、「これらは、究極するところ、神の理性と人間の理性との関係という重大な問題につながるもの」であるとし、この点に関するアリストテレスの考えは明確さを欠くとはいえず、「文献学的よりも思想的に見た時、またアリストテレスが如何に考えたかよりも、如何に考えるべきであったか、を見る時、能動理性を絶対者とするのは、充分理由のあることと思う」と断じ、その意味で『靈魂論』第三巻第五章の有名な箇所が後の神秘思想に重大な影響を与えていることを再三強調する。またテオリアにアリストテレスの神秘思想を認める著者が、『形而上学』第十一卷第七章にふれていることはいうまでもない。

ふつうギリシアの神秘主義といえば、まずプロティノスを考え、プロティノスの神秘主義といえば、なによりもエクスタシスによる神との合一を考えるが、著者の記述はむしろ存在論として流出説の説明に多くを費したあと、倫理学と題した比較的短いパラグラフでエクスタシスを論じ、「プロティノスは、靈魂がヌースとなり、ヌースが自覚によって、自己の根底である一者と合一すると考えるのである。キリスト教のような人間と神との間に絶対的懸隔を認め、愛によって神の光の中に包まれる時も個人の靈魂は存続する、と主張するのは異なる。プロティノスは汎神論者である」と結んでいる。第一章は最後に、新プラトン主義をキリスト教に結びつきやすいものとしたプロクロスを取上げ、プロティノスとの相異に言及している。

第二章 原始キリスト教の神秘主義はパウロとヨハネの二節にわかれている。パウロについては、まずその神秘体験の基礎になったものとして当時のユダヤ

思想、とくにイ。神の国とメシア思想、ロ。死と復活の思想を論述し、このような基礎の上で、ダマスコにおいてキリスト教の啓示を受け入れたパウロの神秘主義は、キリストの死と復活を中心とした「キリスト神秘主義」だと規定する。つぎに「パウロの思想的立場は強いて名づければ、ヘレニズム的ユダヤ教思想とも言うべきものであろう。ユダヤ教要素を基盤とし、ヘレニズム思想によってこれを越えて、キリスト教的立場に立つことが出来たのである」とし、とくに復活についての考え方、およびユダヤ教の中心をなす律法についての考え方の二点にわたって、パウロによるヘブライ思想の超越を論じる。最後に、ギリシアの神秘主義とパウロの神秘主義を比較し、イ。前者が個人的であるのに、後者は集団的、ロ。前者は身体の欲望や靈魂の汚れからの解脱を説くのに、後者は罪からの救いを説くという二つの相違点をあげ、『『神秘主義』という時、人はしばしばプロティノス流の神との『神秘的合一』をだけ考えるようであるが、キリストによる購罪は最大の神秘であり、その恩寵の体験は最大の神秘的体験であると思う』と結んでいる。

第二節では、ヨハネの『福音書』と『第一書簡』をもとに、そのイエズス・キリスト観や終末論を考察し、パウロが「キリスト神秘主義」であるのに、ヨハネは「神の神秘主義」であるなど、いくつか両者の相違をあげたのち、「パウロの思想においてはヘブライの伝統的思想が基盤となっているが、ヨハネにおいては、ギリシア的思想（ギリシア思想及びギリシア思想の影響を受けた思想、例えばグノーシスなど）の影響がパウロに対してよりもより強いことは明らかである」と結論する。

第三章は両潮流の総合と題して、西方のアウグスチヌスと東方のニッサのグレゴリウスおよびディオニシウス・アレオパギタを取上げる。アウグスチヌスについては、まずその神秘思想の基盤として、『三位一体論』と『教師論』を手がかりに、人間靈魂の構造に関する考えを、また『靈魂の大きさについて』を手がかりに、靈魂の神観想への上昇の考えなどをみたのち、その神秘思想的な叙述を前期と後期とにわけて解説する。すなわち前期では、『マニ教に反対しての創世記講解』、『キリスト教教理』などにそれぞれ出てくる神の観想にいたる七つの段階を説明し、『告白録』から「オステシアの瞑想」を取上げ、プロティノスの類似した箇所をも引用して、両者の相違を示唆する。後期に関しては、

『創世記逐字解』第十二巻のrapiturといった表現に、『コリント前書』第十二章におけるパウロ的体験を、また『パウリナへの書簡、あるいは神を見ること』などにもみられるアウグスチヌスの愛用語 adhaerere Deo に、愛による神との合一の思想をみている。

つぎに「新プラトン主義はアウグスチヌスとディオニシウス・アレオパギタを通して西ヨーロッパに入ったと言われている。その相違は、アウグスチヌスにおいては新プラトン主義が自家薬籠中のものとされて原形を止めていないのに対し、ディオニシウスの場合は新プラトン主義の原形が相当保存された仮でキリスト教の思想体系化に役立てられているという点であろう」とし、ニッサのグレゴリウスとディオニシウスが、どのようにギリシア思想を深めてキリスト教化したかを考察する。すなわち、グレゴリオスの霊の神への上昇という思想は、プラトンのエロスの上昇やプロティノスの一者との冥合に通じるものではあるが、自由意志と恩寵との共働説をとるところに、その神秘主義のキリスト教的内実があるとする。またディオニシウスについては、『神名論』によって神の名称に関する問題をみたのち、『天上階制論』によって天使の階制を説明しながら、プロティノスの浄化、観念、忘我が浄化、照明、完成とキリスト教的に変化されたことに言及し、最後に「神と一つになる」ことを論じた『神秘神学』を取上げ、その「無知の闇」という思想が東方のものであることを指摘する。

第四章、第十二世紀の神秘主義で取上げられるクレルヴォーの聖ベルナルド、聖ヴィクトール学派のフーゴーとリチャードに、それぞれ神秘主義的な著作があることはいうまでもない。まずベルナルドについては、『謙遜と傲慢の諸段階について』にしたがって、謙遜の十二段階と傲慢の十二段階を列挙、説明し、つぎに観想しうる靈魂の構造についての考え、とくにその自由論（『恩寵と自由意志について』）に注目するが、『省察』における天使論、神翰にも簡単に言及する。最後に『雅歌についての説教』から、その神秘体験の記述を引き、ベルナルドにおける神秘的合一、すなわち観想はギリシアのような主知主義的なものではなく、「感情的に、愛によって到達されると考えられている」と結んでいる。

フーゴーについては、『秘蹟論』によってその該博な学問の分類を紹介し、神的神学、すなわちキリストの託身と贖罪を知るには恩寵が必要であり、さらに

恩寵を得るには心の準備が必要だとしていることから、『世の空しさ』、『ノアの道徳的箱舟』、『ノアの神秘的箱舟』などにもとづいて、観想への準備を論述、最後に『靈魂に与えられた結納金についての独白』にある神秘的体験の記述を引用して終る。リチャードの項では、いうまでもなく『小ベンヤミン』と『大ベンヤミン』についての解説が重要な部分をしめる。とくに『大ベンヤミン』における観想の六段階を説明したのち、『烈しき愛の四段階』を取上げながら、このリチャードの「キリストの十字架の神秘主義」を近代的神秘主義の一つの先駆として評価している。

以上、順序にしたがって、ただその骨組だけを紹介したにすぎないが、原典に即した研究の成果である本書が、西洋の神秘主義を研究しようとするものにとって、示唆にとんだ有益な労作であることは諒解いただけるであろう。著者が序言でも述べておられるように、さらに十三世紀以降がまとめられることを期待したい。

最近のポルフュリオス研究の動向

—Heinrich Dörrie, *Porphyrios' „Symmikta Zetemata“*

(*Zetemata*, Heft 20, 1959)をめぐって—

野 町 啓

近年、《*Entretiens sur l'antiquité classique*》の一冊として (Tome, VII), 本稿において検討しようとする W. Theiler, H. Dörrie 等の寄稿から成る《*Porphyre*》(1965) や、P. Hadot の大冊《*Porphyre et Victorinus*》の刊行など、ポルフュリオスに対する関心と彼を評価しようとする動向がみられる。直接には散逸したポルフュリオスの《*Σύμμικτα ζήτηματα*》の再構成を意図する Dörrie の本